

温度感覚による他者知覚および自己知覚への影響

小山 真人

初めて会った相手が信頼できる人間であるかどうかを判断することは重要である。そのため、相手が温かい人柄であるかどうかという点は他者の印象形成に大きく関わる。しかし、他者評価とは無関係に思える物理的温度が、他者の人柄の温かさの評価に影響することが知られている。具体的には、温かいものに触れると冷たいものに触れた場合よりも他者の人柄を温かく評価するというものである。

本実験は、物理的温度が社会的温かさの認知へ影響する現象について、この現象の再現と、物理的温度は他者評価にも自己評価にも同様に影響することの確認、そして温度に触れている時間が長いほど社会的温かさの認知への影響が大きくなることの確認を目的として実施した。

手続きとしては、重さの違う5本の温かいボトルの重さを一対比較する課題を2回行い、1回目の比較課題の前後で自己評価を、2回目の比較課題の後に他者評価を行った。比較課題においてボトルに触れ始めてから重さの順番を回答し終えるまでの時間を計測し、この時間をボトルへの接触時間とした。実験参加者の半数には、冷たいボトルを用いて、それ以外は同じ手続きの実験を行った。

結果、一定時間温かいボトルに触れた群は、冷たいボトルに触れた群より他者を温かい人柄だと判断した。さらに、温かいボトルに触れた群のみ、ボトルに触れる前よりも自身を温かい人柄だと判断した。温度物体との接触時間と、温度の人物評価への影響の大きさの関係については、他者評価においては接触時間が大きくなるほど人物評価への影響も大きくなり、自己評価においては、一定時間までは人物評価への影響が大きくなったが、それ以上は大きくならなかった。

これにより、物理的温度が社会的温かさの認知に影響する現象を、接触時間が長い場合という条件付きで再現することに成功した。また、温かいボトルに触れた場合のみ、自己の社会的温かさの認知が高くなり、他者評価と自己評価両方に温度が影響することの確認に一部成功し、温度の影響が温度を知覚した直後の人物評価に対して生じる可能性を示唆した。しかし、他者評価への影響と自己評価への影響が同じ現象だとは確認できず、これら二つの現象が異なるメカニズムで生じている可能性を残した。温度物体との接触時間と、温度の人物評価への影響の大きさの関係については、接触時間が長いほど人物評価が大きくなるわけではなく、適正な接触時間が存在する新たな可能性を示した。さらに、冷たいボトルより温かいボトルの方が人物評価への影響が大きかったことと、実験実施期間が冬であったことから、社会的温かさに影響を与える要因が温度自体ではなく温度の知覚であることを示唆した。(応用認知心理学)